音声学から考える商標の称呼の類否　総整理第7回

弁理士　池山拓治

0．言霊と日本

前回と今回は言霊というスピリチュアルな内容に傾いていますが、私は言霊の概念には否定的な立場です。言語学を研究すると、言霊については否定的になることが多くなるという印象があります。その理由は、言語学者ソシュールの影響を強く受けるからか、メンタルレキシコン（mental lexicon　心内辞書、脳内語彙目録）の構成の概念が、言霊の概念と相反するからだと思われます。

ただ、前回も書いたとおり、婚礼祝儀の際に忌み言葉を使わないよう留意したり、名前が性格形成や運命に影響すると考え、子に名をつけたりする言霊の概念は、現代に至るまで多数の日本人の思考に根付いていますし、日本だけでなく、他の国や地域においても日本の言霊と共通する概念を持つことがあることから、言霊を完全に排除して考えることができないのも事実です。また、音声学とのつながりもみられることから、この場で紹介することにした次第です。

1．言霊と聞こえ度

「あいうえお」以外の日本語の五十音をローマ字で表現すると、子音と母音の組み合わせになります。言霊では子音を「父韻」といい、8の父韻が割り当てられ、5の母音の組み合わせの5×8で五十音が生じると考えます。父と母の組み合わせにより五十音が生じるということです。五十音は「あいうえお」の5母音から始まり、「わヰうヱを」の半母音で終わり、間に他の直音を置くことから、五十鈴の始まりと終わりを口腔内で声道が妨げられる度合いが少ない聞こえ度(sonority scale)の高い音を配置し、聞こえ度の低い音を間に挟む構造となっています。

ただ、日本の数か所のみで神道の祝詞として唱えられる「ひふみ祝詞」は聞こえ度の順にはなっていません。「ひふみ祝詞」とは冒頭の「ひふみよいむなやこと」で1から10まで数え、日本語の清音47音を組み替えて祝詞としたアナグラムです。

==========

ひふみ　よいむなや　こともちろらね

しきる　ゆゐつわぬ　そをたはめくか

うおえ　にさりへて　のますあせゑほれけ

「日本神話と歴史」https://rekishinoeki.org/hihuminorito/から引用

==========

2．5母音の中で優性の「い」

神道の祈祷の際に巫女が持つ鈴を神楽鈴といいますが、その神楽鈴には五色の紐がついており、その五色は5母音を表すといわれます。鈴の音で場を清め、5母音を高位とする五十鈴の神々を展開させるのですが、聞こえ度が高い5母音の中でも最上位は「い」であると考えられています。神社で昇殿し、祈祷を受ける際には、あらかじめ祈祷の申込書に記入しておいた祈祷を受ける人のフルネームの後に「い」の音が付され、神社から授けられる書類にもフルネームの後に「伊」の文字が付されることがあります。

複数の表記があるものの、神道において、イザナギは伊弉諾神、イザナミは伊邪那美と書かれ、ともに「い」と「伊」で始まっていることにも着目されます。以前説明したサウンドスペクトログラムにおいて、5母音

のうち、「い」の第一フォルマントは、「い」と同じ高母音と分類される「う」より低く最低であり、また、「い」の音は第一と第二のフォルマントの差が最も大きく観察されることが一般的です。つまり、5母音のうち、最も舌の最高点が高く、声道の狭まりが最も前方に位置する特徴的な母音ということです。

サンスクリット語の順にならったものというのが有力説である日本語の「あいうえお」順ですが、音声学では構音順により、「いえあおう」という「い」から始まる順に並べて観察することが一般的です。

以上の内容は私が今まで宮司や禰宜から受けた説明を抽象化したものですが、それらの説明には異なる事項があり、それは正誤の問題なのか、正誤の問題とすること自体が誤りであるのかは私にはわかりません。しかし、こじつけや後付けかもしれませんが、音声学との共通点を見出すことができることは興味深く思います。

3．次回

商標の称呼の検討においては、どのようにして音を発するかという調音音声学に偏りがちですので、音響音声学や聴覚音声学とも親しむために、サウンドスペクトログラムを使いこなすための説明をする予定です。

以上